# 淨土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十二年十月廿日印刷納本昭和二十二年十一月一日發行

第十三卷　第九號

十・十一月號

目次

淨土の存在について(二)……(三)　中村辨康
○佛をおろがむ心……(六)　佐藤賢順
臘八のころ……(四)　吉田紘二郎
秋の感想
佛教の死生觀……(九)　黑川顯英
○信仰相談……(一三)　中村辨康
世の中に負けた親子……(一四)　中野隆雄
編集後記……(一六)

法然上人鑽仰會發行

# 淨土の存在について（二）

中村辨康

私達は周圍に引きづられ勝である。隨つて身のまわりに「死物」ばかりゴロゴロころがつて居ては私達自身も本當には生きられないのである。

ここに信仰生活の急所がある。信仰を觀念的にのみ考へて居たのでは、畢竟極樂も淨土も觀念のものでしかないからである。

私達の考へから「存在觀念」を取り去つて「生きる」と云ふことに中心を置くやうにすることは極めて大切なことでありながら、中々容易な業ではない。

佛教の修行はそれを訓練することにある。六波羅密の錬行も坐禪觀法の苦修も結局は存在觀的我執をやぶることである。かうした特別な修行に依つて平生の生活を我執なき解脱の淸き心境でやつて行くことにつとめる。それが資生産業皆是佛道であり喫茶喫飯卽是佛道である。

存在觀念は我執と云ふものの基盤となる觀念である。それは「有」も「無」も共に誤つた觀念である。イヤ事

## 第二章　生活の中心

色々な觀念も私達が生活する上に必要ではあるが、然し兎もすれば觀念に災ひされて無駄足を踏んだり、或は横道にそれたりする場合が多い。

事物に對する存在觀念も亦たそれで、單に存在するとばかり考へるのは凡情であつて、すべてのものは常に變化しつつやがては消滅して行くものであるから、それの存續中にそれを有効に役立たしめるところに、本當の取扱ひ方があるのである。

凡ては「生かす」ことに考への中心を置かなくては嘘である。一枚の紙も一滴の水もそれが唯だ「有る」としてでなく「生きて居るもの」であり「生かすべきもの」であると考へて、有効に使用しなければならない。單に有るものとしてのみ見るならば、よしそれが使用されては居るとしても畢竟「死物」の考へでしかない。

實は「有」であり「無」であつても、そこに執着が出來たり又は悲觀が發生したりするからいけないのである。そこに執着があり悲觀があればそれは既に「死」であつて「生」ではないからである。凡べては「生きる」ことに中心が置かれなければならないのに、その「生きる」ことを邪魔して「死」に導くやうな觀念は何處までも是正しなくてはならない。

時間は刻々に過ぎて行くのである。泣いても笑つても過ぎて行くのである。であるから私達はこの過ぎ行く時間を最も有効に生かさなければならない。働く時も休む時も本當でなければいけない。私達の小さい時小學校で「よく學びよく遊べ」と教へられたが、今になつてもつくづくそれが思はれるのである。

この「生きる」と云ふこと、及びその根底になつて居る「存在觀の否定」と云ふこと、この二つの問題が正當に解決されないならば「淨土に往生する」と云ふことも解る筈がない。即ち「存在觀の是正」なしには「淨土」がわからないのであり「生きる」ことの意味を知らない限りは「往生」の眞意も分らないのである。唯だ教へられたままに「淨土往生」を信ずるなら知らぬこと、少しでも合理的に理解しやうと望んで居る人、若しくは迷信的なものを排除した正理の信仰を求めたい人ならば、先づこの二つの問題についてハツキリと認識して置かなくてはならない。

小乘教が人我を否定しながらも「法體恒有」と云つてやはり「存在觀」に陷入り、大乘教が「眞空」を說きながらも「妙有」と云つて同じやうに存在觀の中に陷入つて居ることは、人間性の然らしめた弊害であると云はなければならない。

このことに就ては恐らく佛教學者の人々から批難が出るかも知れない。然し之は私の師事して居る椎尾博士の卓見であつて、これだけの反省をした佛教學者はまだ嘗つてなかつたのである。これは謂ゆる古今を楷定するの見識であつて段々委しく承れば誰でも承服せざるを得ないであらうと思はれる。若し腑に落ちなかつたら一度博士を訪づれるがよろしい。

兎に角佛教の「三法印」にあてはまらないやうなものは、たとへそれが淨土教であらうが聖道教であらうが、正しいものではなく「非佛教」のものでしかないのであると云ふべきである。

また人生に取つて「本當に生きる」こと以外は一切戯論でしかないものである。それ以外はそらごとむだごとであつて何の役にも立たないものである。この本當に生きることこそ本當の往生の意味を眞直に正當に受取れる基礎となるべきものである。

此故に生活の中心を存在觀の上に置いてはいけない。

# 臘八のころ

吉田・絃二郎

いつの間にか庭の蟲の音がすつかり絶えてしまつた。それでもしばらくの間は部屋の片隅にすだく蟋蟀の聲を聽いたが、それもこのころではまつたく聞かれなくなつた。

今更のごとく年の瀬の近づいたことを感ずる。

年々再々のことであるが、年の瀬になれば、しみじみと物事を思惟するやうな心構へになる。

臘八に釋尊が悟りを開かれたといふこともわたくしどもにはなつかしい。

時雨空に不圖梢頭に取り遺された數顆の柚子の實を見出すばかりにも、しみじみと心の奥底に沈潛するものを感ずる。

「愚案ずるに冥土もかくや秋の暮」といふ芭蕉の句があるが、晩秋初冬の時雨空を仰ぐごとに一しほ身に泌む句である。

冥土とは死後の世界であるが、それは何んな世界であるかわたくしたちにはわからない。しかし芭蕉が秋の暮を冥土になぞらへて考へたことは詩人らしい想像である。

時雨空の晩秋初冬の大自然につつまれてゐるわたくしたちは即ち冥土に生きてゐるのであると、考へることはできないであらうか。

木は悉く木の葉を落とし、滿目蕭瑟たる裡に一塊の石のみ默々として考へざるが如く、考ふるが如く庭前に在るを觀るばかりにも、人は刹那に死し、悠久に生きる法悅と寂寞とを感じないではをられない。

子供たちは春が來ればをどり、冬が來れば雪こんこんをうたふ。

わたくしたちも秋が來れば悵然として人生の無常を悲しみ、時雨が降れば冥土を觀ずるがいい。

自分の心を偽らぬ生き方、自分の悲しみを欺かぬ感じ方こそ宗教であらう。

未來がないと觀ずる人には未來はないであらう。妻を失ひ、子を亡くした人たちは未來を信じないではをれない。その人たちにとつては未來は存在するであらう。

霜の朝畑の徑を歩いてゐると一塊の八ツ頭が捨てられてゐる。或る人はつちくれだと思つて蹴るであらう。かれにとつては八ツ頭は未來を持たぬつちくれである。

また或る人は捨てられた八ツ頭を叮寧に拾ひ上げて土の底に埋めるであらう。八ツ頭は春になつて芽を吹き、新生の未來を具現するであらう。

悲しみに傷められた魂は惠まれてある。それは未來を欣求することによつて未來に生きることを得るからである。

わたくしの家の周圍には武藏野特有の欅の老樹が亭々として聳えてゐる。秋になつて、これ等の欅から落ちる欅の種子は幾十萬顆を算へるであらう。しかも春になつて芽生えて來るものといつては二三に過ぎない。その一つ一つがまさしく未來性を内包してゐながら、落ちたまま、捨てられたままである限りは本然の未來性を滅してしまふ。因緣の熟さないといふことは、半ばは自分自身の心構へにある。

タゴールに「暗室の王」といふ作がある。王はいつも暗室の中にのみをられるので、誰れも王の正しい姿を見た者がない。人々は王の姿をいろいろに想像し、いろいろに噂さをする。或る者は王の姿は醜いにちがひないといひ、或る者は鬼のやうに恐ろしい姿であるといふ。

王に一人の愛娘がある。何とかして父王の眞の姿を突きとめたいと思ひ、王宮の侍臣を引きつれ、豪奢な馬車に乘つて父王に面謁するが、いつも王は暗室にゐて、そのまことの姿を見ることはできない。王女はつひに王の姿を見きはめることはできないかと落膽する。たまたま王宮は荒され王女は乞丐のやうな姿になり、一人の侍女をも連れず、跣足になり、埃を浴びて父王を訪ねて行く。父王ははじめて白日の下にその姿を愛娘の前にあらはす。父王の姿は莊嚴をきはめ、端麗をきはめたものであつた。

美しい、なつかしい未來はあるであらう。但し未來を信ずる者のみに。未來を精進欣求する者のみに。

**生きる者のみにある未來性**

回る獨樂は倒れず、流るゝ水は腐らず、眞實に生きる者のみに善美なる人生と未來とがある。

# 佛をおろがむ心

佐藤賢順

私どもは日頃どのやうな心持で佛をおがんでゐるでせうか。朝夕に佛に花を捧げ香を焚き、經を誦し佛名を唱へますが、その時の心持はどのやうでせうか。

美の國、藝術の國であるわが國には、飛鳥、奈良の時代から今に至るまで、數限りもない澤山の佛像が製作されてゐます。大きいのは奈良の廣舍那佛から小さいのは掌の中に納まるほどの念持佛に至るまで、金銅像あり石像あり木像あり、繪畫像あり繡像あり、實に樣々であつて、その一つ一つは丹誠をこめ、精根の限りを盡して出來た優れた作品であります。これほどに數多くの尊像を持つてゐる國は、世界のどこにもありません。私どもはいつでも身近かに優れた佛をおろがみ、その前に額づくことができるのであります。これは私どもの幸せの一つです。

それならば佛をおがむ時、どんな心持でおがみますか。木の佛、金の佛がそのまま魔力に似た特別の力を持つてゐて、秘かに心願をかける者のためには、それを叶へてくれると本氣で信じておがむのでせうか。さういふ人はこの頃は恐らくは極めて少ないのではないかと思ひます。もしさう信じてゐる人があるとすれば、その心持は迷信的といふ外はなく、身代りになつて頻に火傷を受けて下さつたといふ頻燒阿彌陀佛や、その他、何々の身代り地藏尊といふやうな多くの傳說に殘されてゐる態度と同じで、傳說的な、低俗な心持と言ふより外はありません。それこそ非科學的とか偶像崇拜とかいふ非難を受けることになるのです。佛教徒が佛をおがむ心持はかうであつてはなりません。初めかうした心持から入つたとしても、だんだんに佛道の正しい考方に慣れて、もつと深い心持に進まねばなりません。

昔、唐の時代に丹霞天然といふ禪僧がありました。初冬のある日、落葉や小枝を掃き集めて焚火をして暖をとつてゐました。乾いた枯葉や小枝がプスプスと音を立てて燃え落ちてしまふと、丹霞は何を思つたか、本堂の中へはいつていつて、どこからか一軀の佛像を持ち出してきました。そして何のためらうこともなくそれを——佛の像を、焚火の中へくべてしまひました。木像はやがてプスプスと燻り、チョロチョロと焰を上げ始めました。丹霞は箒を傍に置いて、焚火にはだかるやうな恰好で手足を暖めてゐました。するとそこへ修行仲間のもう一人の若い僧がやつてきて、自分も火にあたらうとしてふと焰の中を見ました。焰の中には一軀の木像が横たはつてゐて、それが紅の火に變りつつあつたので、驚きの餘り大聲を上げました。

「おい、これや佛さんぢやないか。佛さんを燒いてどうするんだ。」

丹霞は平然と答へました。

「いま舎利を取つてゐるところサ。」

舎利とは佛の遺骨のことで、釋尊が亡くなられてから御遺骸は火葬にして、佛舎利は八ヶ國に分けてそれぞれ舎利塔を造つて供養したといふ、それほどに大切な舎利を取らうとして、いま佛體を燒いてゐるのだといふのです。しかし相手の僧は怒りを全身に發したやうに手足を振はせて叫びました。

「ばか、これは木で造つた佛像だ、燒いたつて舎利なんか取れやしない。」

丹霞は恬然として答へました。

「木なら燒いたつていいぢやないか……。」

この話は一片の笑話ではありません。これを傳へてゐる或る古い本の筆者は「丹霞木佛を燒いて祖風いまだ泯びず」と賞めてゐます。佛像を燒いたことは、佛道を汚し辱かしめたどころか、却つて佛陀釋尊のほんとうの心持を表はしたといふのです。木佛や金佛に執はれて、佛像そのものが何か生きた者であつて、超人的な魔力を備へてゐる、そしてこれに御供物でも献じて祈願を込めれば、その祈願がどんな自分勝手な虫のよい祈願であらうと必ず叶へてくれる、といふやうな思ひ上つた態度は、決して佛道ではないのであります。

心の持ちようです。たとへ金銅に鑄造せず石木に彫刻せずとも、そんな魔力を持つた佛を腦裏に描き、天上に想ひ、幻影に浮べるとすれば、それは同じことで、やはり妄想であります。

しかし翻つて思ふに、佛をおがむといふことはただそれだけのことでありませうか。もしそのやうな素朴な心持を反省して、一層深め一歩進めたらどうなるでせうか。信心の深い人達が齋戒沐浴して一刀を彫むにさへ三禮して作り上げたといふほどの彫像は、決して無下に斥け去るべきではありません。人間の到達し得る限りの美しさ清らかさ素直ほさが、そこに描き出され刻み出されるのです。大和の中宮寺の半跏の彌勒菩薩を前にしたとき、私どもはいかにその清淳な美しさに打たれるでせう。童女童子の持つ天眞の清らかさが彫り出されてゐるのです。また法華寺の十一面觀音の豐頬に漂ふ微笑は、實に人間の表しうる限りの私なき慈愛の表現であります。あらゆる技巧と敬虔心とをもつて、美や聖の理想を追求して描き出したものが佛像であつて、それだけの作品を作り出すには、作者の一方ならぬ苦心——いや、ただの苦心ではない宗教的な苦行がなければなりません。それまでにして出來たものが私どものおがむ對象にならないはずはないのです。

かういふと、或はそれに對して、美の理想の表現ならば藝術の作品であつて、それが必ずしもおがむ對象にはならないではないか、と言ふ人があるかもしれません。藝術上の作品である以上は觀賞すべきであつて崇拜すべきではない、丁度、博物館か展覽會に並べてある彫刻や繪畫を、次々に眺めて味つてゆくやうに、眺めて味へばよいといふのであります。しかしすべて優れた作品になると、藝術だの宗教だの觀賞だの尊敬だのといふ區別はなくなるのです。もともとかういふ區別は人間の思考が便宜上さだめた區別であつて、概念上のことに過ぎないのですから、優れた作品になると、文學でも美術でも、そのやうなけじめがなくなつて、互ににじみ合つてくるのは當然です。藝術がそのまま宗教になり、美が聖と滲透して觀賞が禮拜に轉ずるのです。

私は博物館や寶物館で尊像を仰ぎ見てゐて、ついおがまずにはゐられないやうな氣になることがよくあります。博物館などで所々に香爐でも置いてあつて、心のゆくままに香を焚くことができたら見る人達の感じもよほど變るだらう、とよく思ふことです。

それはさておき、かういふ心持で佛をおがむのは、佛體そのものが威力を持つてゐるとしておがむのでなく、佛像に表現された美しさや清淨や慈愛を通して、佛の智慧や清淨や慈悲の前に跪づき佛をおがむのであります。それは迷信的な偶像崇拜の態度ではありません。そんな低俗な心持を遙かに越えて、佛像を象徴として、繪畫にも彫刻にもとうてい表現することのできない佛の智慧そのもの、慈悲そのもの、悟りそのものをおがむのです。このことを、佛像は象徴（シンボル）としての意味を持つといひまして、佛像は人間が表現したものよりはもつと高い深いものを直觀する媒介となるのであります。丹霞のやうに木佛を燒いて妄想を破棄して、おがむ對象など何も要らない、としてしまへばそれまでですが、何もないよりは何か象徴があつた方がよいことは事實であるし、象徴としては木片や紙片よりは佛像の方がよりよく、また同じ佛像ならば人間の表現力の限りを盡して制作した優れた作品の方が、よりよいことはいふまでもないことです。

それならば佛像といふものは、佛の悟りそのものの象徴としておがむものであるといふことに盡きるのでありませうか。ここで再び私どもは事柄を一層深く追求してみなければなりません。するともう一度翻轉して、心持が深まることに氣がつくでせう。おがむ時には誰しも私を忘れた三昧の境にはいつて佛と私と一つになるので、象徴だの媒介だのといふ分析的な考へがつき纏ふわけではありません。象徴といふのは、おがまれる對象の意味を傍から解釋したときに生れてくる說明で、いはば西洋風の辯解でありませう。佛道本來の心持からいへば、象徴といふやうな手段的、間接的な考へ方は、一應のこととして、更にそこを越え出でる要があるのです。佛道の深い信仰からいへば、森羅萬象何一つとして佛の智慧、佛の慈悲の現れでないものはありません。萬物は神に創造されたといふやうな間接的なことでなく、萬象の一つ一つがそのまま佛の慈悲なのです。鳥の歌ふのも花の咲くのも虫の鳴くのも谷川の流れるのも、佛の言葉そのままであり、實相であります。聲字卽實相と申して、いかなる言葉も文字も象徴ではなくて實相そのものであります。かういふ深い考へから佛をおろがむ時には、佛像は魔力を持つた偶像でもなく、それを通して悟りに觸れるための象徴でもなく、佛の悟りそのものであるといつて差支へないのであります。「繪像法然」といふ言葉があります。繪に描き木に刻んだ姿そのままが佛であり實相であるといふ意味です。人間が丹青の妙を盡して描き出した佛は、美の人間的な理想の表現ではなくて、佛そのものの美しさの現れに外ならないのであります。

（結）

**法然上人秋の御歌**

あみだ佛に染むる心の色に出でては
秋のこずゑのたぐひならまし

# 佛教の死生觀

黑川顯英

## 一、人生肯定への道

宗教心は、私共の生活のあらゆる形式を通じて表現すべきであるのに、現代人の多くはこれを除外してゐる傾向がある樣である。「悲しみ」につけ、「苦しみ」につけ、特に「死」と云ふものを聯想して陰氣なもの緣起の惡いものとして片づけてゐる風に見られる。それには一面の理由として「苦」を嫌ひ「死」を恐怖する氣持があるためであらうが要するに臭いものには蓋をしろとの逃避心の動きがその根本の樣に考へられるのである。

佛教は所謂「死」「苦」と云ふ問題について、その解明をなさんとするものであり、――安樂な、臭いから蓋をするとか、逃げるとか、の方法で人生する人々に對して、それは駄目だその中へ飛び込んで根本的に除き去らねば駄目だ、と努力するこの心掛けその態度に、佛教の出發點があるわけである。人間として、絶對自由な生活に入らうとするには先ず、人生、自己、一切をあげて一度否定しなければならない。否定の波をくぐらない肯定は決して絶對的なものではない。輕々しく現實を肯定し、人世を肯定し、性を肯定した現代人は、彼等の希望した考へと凡そ緣遠い浮薄なものしか齎されなかつたのである。此に一切の否定は、即ち一切の肯定となる必然性を見究めなければならない。例へば、「紅一點」と云ふ場合に於ては、他の色彩と云ふ概念の中には「紅」が否定せられてゐるから紅の紅たる所、即ち紅一點がはつきり印象ずけられるのである。始めから紅が肯定せられてゐるては左程めだたない。

人生と自己とに信頼し執着する根性をうち破つて、否定の川を渡り終る時、そこに「肯定への道」が開かれるのである。卵はその外形が大變美しいけれ共、その殼を打破らなければ雛はその生命を育み成する事ができない。佛教は一面極端な厭世思想、無我主義を說くのもこれあるがためである。さればと云つて、家を捨て、世を捨てて禁慾生活に入る必要はないのであるが、精神的に一度一切を見切つてしまわねばならない。

ライプニッツは人生を樂天的に眺め、ショウペンハウエルは悲觀的に眺めたが、一言にして云ふならば下世話の「樂は苦の種、苦は樂の種」や又は『歡樂の奧深き宮殿には、覆面の惡魔ひそむ』が最も素直な言葉として受はとられる。「苦樂は共に苦なり」――これが眞實眞理の言葉であろうと思う。

## 二、厭世の眞義

佛教の實相は「人生は苦なり」といふ嚴肅な眞理より立脚してゐる。現實の姿を奧深き眺める時、「苦樂は共に苦なり」と云ふ事實にはつきり到達するのである。佛教は此の根底ある事實を立場として出發したのであるからもとより陽氣なものではない。或人は佛教を非難して「厭世教」と斷じてゐるが、早計無智とも言ふべく調子はずれである。大體厭世それ自體の眞意を知つてゐるのであらうか。

逆境不遇の時、或ひは幸運順調の場合、何れを問はず厭ふべきを厭ふのが厭世である。釋迦について見るに、釋迦はカピラの王城に生を享け、名譽と黄金と權勢、どれ一つ缺かない、何不自由ない皇太子として成長し、更に花の眞珠ヤショダラを妃とし、二人の中に王の王子まであり乍ら、此を捨て、あれを捨て愛馬カンダカに乘つて靈鷲の山高く入られたのは一體どうしたわけであらうか。王城を捨て、妻子を捨て、と曰へば簡單であるがこの忍び難きを忍んで斷行せられたのはどうしたわけであらう。この事實をよく考へなければならない。單なる厭世思想ではないと云ふことがわかると思ふ。むつかしく云へば、厭穢欣淨と云ふことである。欣求淨土觀——崇高にして、深妙なる精神であり純善清淨を願ふ一大心念であると見るのである。

水魚と人の云ふ。水ありて魚、魚は水中、即ち醜きを厭ひ、穢れるを捨つると共に、清き、明るき、眞實なるものを欣ぶ考へを決して離して考へてはならない。共々此の二つを具備してゆく事はすべての進歩開發の基盤であると考へるのである。

## 三、現實と理想

私達の生活してゐる此の現實の世界は決して完全なものではない。この完全ならざる世界はこれを一歩々々理想境へ進ませてゆかねばならない。現實のこの世界は、相對的な有限の境界である。この有限の世界より、完全で絶對無限の境界を欣求しなければならない。あらゆる宗教、哲學は皆齊しく有限から無限に進むと云ふ向上主義に根本をもつてゐるのである。有限と無限の二大範疇により、一を厭ひ一を欣ぶ事は人類全般の天性と云つて差支へない。理想と現實、この二面を綜合し、止揚して眞實體驗してゆく所に人間としての價値存在がある。——佛性の開發の自由性がある。人間は常に、理想の淨土を憧憬しつつ自らは現實の苦惱の中に縛られて、流轉矛盾の生活をしてゐる。人間の弱さを知ると共に、生くべき人生の價値がどこにあるか、即ち、眞善美の眞理を探求する事になるのである。これなるが故に哲學、宗教、文化、科學、ありとあらゆるものが出るのである。

佛教では有限界、即ち現實世界を三界と云ふのである。反面無限界を涅槃とも、絶對とも、淨土とも云ふのである。理想界であるから、涅槃とか淨土とか云ふ文字で表すことの出來ないことはいふまでもないが、止むを得ずこの文字で表現してゐる。涅槃——ニルヴーナ（NIRVANA）の意味は「滅」である理由をもつて、西洋佛教學者の中にはその眞意を「虚無」と觀たものが居る。これは實に淺薄な見方であつて、元來ニルヴーナは一切の現象を通り過した無限絶對の理想境なのである。言語文字をもつては云ひ現し得ないのであるが強いて之を顯すには、一切の現象を否定しなければならない。このことについて、釋迦は『有字は是れ生死の法、無字は是れ涅槃の法』と述べられてゐる。

現實の世界、人類そのものを完全でないと思へばこそ、無限の佛陀を憧憬し、理想としてゐるのである。私共の向上思想のある限りこの無限涅槃の一大希望を捨てないが、只、現實を忘れて理想にのみ走ると云ふ事と本末を轉倒してはならない。現事の人生面に於て自然は四季を迎へ、人は苦樂の別ある如く、劣れるものより、勝れるものを「淨」の句で表すならば、この世界に又淨土と穢土があるといつて差支へない。總べて大を成さんとする時は小を積まねばならない。

有限より無限へ行くには、勢ひ現實に於て無數の淨善と完全の領域を欣求しなければならない。あらゆる方面に於て、發奮精進して人間性としての眞實を把みとり、更に社會淨

化へと志さねばならない。これが現實面に於ける厭欣心であり、延いて無限界への厭欣心と成長するのである。

## 四、死の解明

神聖なる人生の意義を、量のせまい考へ方で消化しようと往々煩悶の淵に陷り世を厭ひて死に行くものが尠くないのは眞に悲しむべき事である。藤村操の「巖頭の辭」を始め、有無象の處世閉鎖を原因として、厭世自殺をする者があるけれ共、その思惟の大半が現苦より未來の快樂を希む所に因してゐると思ふ。あらゆる環境の意もかまわず、徒に自己さへ生を離れれば、と云ふのは自調自度の僭さるるも甚だしいことである。

佛の教へは人生を殺すものでなく生すものである。佛の教へにして若し死をすすめるならば、鐵鎚と藥量を珠數と共に持參すればよいのである。

苦痛に敗けて自殺するものでなく、苦悶に克ちて自活するものである。

現實の苦悶の如きは、將來永遠の大理想の光明によつて忽ち打ち破られてしまうのである。要するに私共は、私共の肉體のある限り向上進歩の厭欣心によつて、日常「性の善」を磨き、その開發を促しつつ大理想に歸依し信仰することが大切である。

死は宗教へ入る門である。

凡そ人間のみならず生物は、自分の生命を維持すると云ふことが先決の事柄である。總べては「苦」を避け「死」を厭ふ事は自然法爾の道理である。釋迦が四門遊出を一大轉機として、出家の動機苦悶は正に「死」の解決にあつたと云へと。總べて「死」に對し、生物學的な自然に對し、主觀的に觀て「大我に生く」とか「死線を超ゆ」とかの如く宗教的な死、と云ひ得ると思ふ。「死」によつて終焉する生と、死によつて始る生とは、同性質のものではないが、自然界の「生」は「死」と共に終りであるが、死と共に始る生は、更生とか、大悟とかの意味に於ける宗教的な生である。——『死は』恐怖である。

恐怖とは未來についての心構へから起る。フオイルバッハは「死が無ければ宗教が無いだらう」と批判してゐるが、一面正しい眞理である。然し凡ゆる死が恐怖として感ぜられるのではない。己が身に死の影が迫りくる時、恐怖感が湧いてくるのである。その死への恐怖、この恐怖より脱脚し、死の克服を念ずる時、宗教が生れ、發心修道の轉機がつくられてくる。「枯草」の細身を漸く樹の枝に支へながら、尼連禪河に浴みしようとする釋迦、この釋迦の姿こそ宗教的生へ正覺せんとする不斷の精進そのものの姿である。

人は生れ人は苦しみ人は死んでゆく。人生これ苦の連續であり、苦の流である。一休禪師ならずとも、人は死を思ふ時、人生芽出度くもあり、芽出度くもなし、と考へざるを得ないのである。この『苦』より離脱することここに宗教の鐵扉が開かれてゆく。

現代人はこの「死苦」を正しく凝視せずして徒に生に魚歡愛着してゐるのではないだらうか。龍樹菩薩は『嗚呼空なる哉人世』と偉大な天聲を發した。妙麗なる天女の舞も、官能に醉ふ華やか舞踏も、一面假相に過ぎぬと見るも無用では無い。即ち龍樹の考へは、有限を無限に探ることの矛盾を知り、實在の思想を否定して、一切は空なりと呼んだのである。

現代の宗教は死よりも生の宗教として進展しなければならない。それには「死」を凝視すると共に正しく「死」を解明してゆくことが基礎づけらるべきである。然しながら、生は死、死は樂なりとする死への甘美な憧憬、及び、自らの生を斷つが如き行爲は斷じて宗教の本質ではない。

嚴そかに人生の行路を目視し、死を凝視して、それを透して永遠つきざる生命を諦見するのである。

滅びる肉體より、亡びざる精神へ、
消えゆく形骸より、失はれざる心靈へ、
そしてそれらと共に、眞人、即ち眞生の、眞實生命の生活をなす人間へと精進するのである。（おはり）

# 信仰相談

## 信仰上の惱みや佛教についての疑惑にお答えします

擔當　中村辨康

## 教訓談は眞實ではないか？

**（問）** 直接お返事を頂いた中に私の質問に對して六道輪廻は老幼への教訓なりと云はれ、また存在は迷ひであるとして淨土の存在を否定されましたが、かかる說は誰からも見聞したことがありません。法然上人始め淨土教各祖師方の書中には六趣四生の御言葉は至る所に見受けますが、之を教訓說なりとして眞實を否定する時は是等の文はどうなりますか。彌陀の願力に乘じて生死界を離れると云ふ根本の教に矛盾しはしませんか。

淨土の存在觀念を否定されましたが夫では唯心の彌陀巳心の淨土を考へて居られるのではありませんか。私は淨土は人間の智惠や肉眼では判らないが死して彼土に往生して初めて如來も淨土も知見出來るのであつて、生れると云ふ以上、凡夫が人間に生をうけて人體を受くるが如く佛土に往生すれば佛體を受けて實在する淨土に生れると云ふ風に思つて居りますが之は誤つた考へなのでせうか。重ねてお尋ね致します。（**京都、東山區今熊野・高山與**）

**（答）** 御質問はまだ外に箇條書きになつて居るのがありましたが、大體以上で盡きて居りますから、そして質問が馬鹿に長たらしいから御不滿かも知れませんが、これだけに止めて置きます

先づ最初にお斷りして置きたいのは「存在觀念」の否定は「無存在」であると速斷して居る貴君のお考へは矢張り「存在觀念」であると云ふことです。存在の「有無」共に觀念として考へるだけのことで、之を「有無の二邊」に執着するものと否定するのです。有と非有とは共に存在觀念です。それから次には「存在」と「存法觀念」とは異ることを知らねばなりません。存在觀念の否定は「存在」と云ふ觀念の否定です。それ故存在觀念の含定を直に非存在として片づけるその考へがやはり存在觀に捉はれた觀念であつて一方に片づけなくては承知のならぬ物質思想の然らしめた考へであるのです。

觀念としては成立しましても、誤想であると排捨するのが佛教なのです。空間も時間も獨立してあるのでなく、時間と空間とは卽一的なものですが、觀念としては成立します。觀念論では時空を切り離して考へ得ますが、然し「物の存在」は時空を切り離して考へては誤りです。時間のない「物」の存在はあり得ないからです。

それからもう一つは「教訓」と云ふものは事實に非らざる「嘘の話」と云ふ考へは誤りでありますか。教訓談がどうして惡いのですか。あなたは教訓は無用と考へるのでせうか。道德も宗教も教訓ならざるはありません。教訓でない宗教は非宗教です。比較的教訓的でな

い神祕的宗教さへ教訓を含んで居ります。

そこで先づ六道輪廻と云ふことですが、これは元と原始佛教にはなかつたのですが、後になつて佛教に付いて來た思想です。元來は「無靈魂說」である佛教は「業」と云ふ觀念に依て自然に轉生說が採用されるやうになつたのです。佛教以外の印度の宗教では「天」は最上の理想鄕として考へられたものです。然し佛教はそれを採用したけれども、迷ひの世界に於ける最上のものであつて、佛教の考へて居る覺醒世界としての最高の理想境ではないとして扱ひます。卽ちそれは凡人の迷情から考へた理想境であるとしたのです。それ故「淨土」を天國と同等に考へたら、それも迷ひの世界たる六道の一たるものに過ぎなくなります。六道を善惡の二に分け、天と人と修羅とを三善道とし、獄と鬼と畜生とを三惡道としましたが、六道を要約すれば善惡二道であります。是れ教訓談でなくて何でありませう。既に「道」と云つて居ります。「道」とは生活のことです。人間に取つて「道」とは人間の步く道以外のことではありません。若しそれ以上のことを考へて居るならばそれは「存在觀念」の然らしめる所のものです。然しながらこれは現に私達が毎日經驗する輪廻の姿でもありますから、よくよく反省すべきであると同時に、このままでは現在からして輪廻する上に、未來永遠に輪廻しなければなりませんでせう。それはまた佛教の目的とするものでなく、迷の中に於いての善惡批判として私達の反省材料とすべきものでありますから、佛教教理の大人に對するよりも、私達のやうな程度の低い者達への教訓として採用されるものであります。佛教の大人に對しては迷悟二道に依つて訓育します。苦集（迷）と滅道（悟）との二諦、十二因緣の順觀逆觀、八正道等の三十六道品、六度四攝等の大乘菩薩道などみなそれでありません。殊に大乘教に於ては般若を基礎學といたします。般若とは眞實の智惠と云ふことですが、その內容は存在觀念の否定なのです。存在觀を否定すると直ぐ「無」を考へたがりますが「無」もまた存在觀念ですから、それも亦た否定するのです。それでそれを「空」と云ひ又は「中」と云ひます。「空」の方は思想的であり「中」の方は實踐的ですから一を「空觀」と云ひ一を「中道」と云つて區別して居ります。

然しながら「空」と云ひ「中」と云ふも言葉そのものはやはり概念の範圍を出ることが出來ませんから、椎尾博士はこれを「生きる」こととして考へ方を觀念の外に置くこととにされたのであります。卽ち私達の實踐上には「本當に生きる」事だけでよいのであつて「有る」とか「無い」とか云ふ存在觀をもつならばそこに執着を生じ、又は悲觀するなど迷ひの根源となり誤りの元となるものであるを指摘されて居ります。

またあなたは「存在觀念の否定」を以て、唯心の彌陀己心の淨土と云ふ方向へ論點を持つて行かれましたが、唯心も己心もそれは觀念であつて生きる事實ではありません。彌陀は十方至らざるなく相として相ならざるはないのですから無論觀念の中にもありませうが、觀念の中にのみあるとした禪宗流の考へは偏頗です。元來唯心の彌陀己心の淨土の論據は觀無量壽經の第八觀に「諸佛如來は是れ法界身なり一切衆生の心想の中に入る云々」の下の「是心作佛是心是佛」の文に依つたと云はれて居りますが、善導大師はこの文を以て指方立相の色相を立てる根據として居られ、丁度眞言や禪宗などの見方とは正反對なのであります。

次には本願に乘じて生死を離れて淨土に往生すると云ふことですが、これを何かたましい見たやうなかたまりが向ふへ行くと云ふやうに存在觀念的に考へたら、もち佛教ではありません。それならば法然上人の「一念に一度の往生」と云はれたことを何う考へたらよろしいでせうか。また人間が人間界に生を受けるやうに淨土に生れて佛身を受けると云ふお考へですが、それでは淨土は何處にあるのでせうか。そして佛身とはどんなからだなのでせうか。私こそ教へて頂きたいものです。淨土は靈界であるなどと逃げてはいけません。その靈界は何處に實在するのですか。釋尊は佛ですが靈界におられたのでせうか。或は精神の世界なのでせうか。そうすると精神的な觀念界なのでせうか。釋尊の肉身と佛身と何う異るのでせうか。そこに色々反省があつて然るべきものだと存じます。これについては今度或程度回を重ねて少し述べさせて頂きたいと思つて書き初めましたから、凡てはそれにゆづります。御諒承下さい

實話

# 世の中に負けた親子

中野隆雄

東京の銀座の眞中、元服部時計店のPX前に三人兄弟のクツみがきが居りました。わりに身ぎれいで、言葉使いもよく、すなおな子供達でした。ときどき行われる「浮浪兒狩り」には、この兄弟は「家がある」というのでいつものがれて居りました。ところが十五を頭に九つに七つの三人兄弟にもう一人十三になる子が加りました。この子は中學生の服を着て制帽をかぶつていました。

「中學生のクツみがき屋」だと同じ浮浪兒仲間から親しまれました。この四人の兄弟には、ほんとうに家もあり兩親もありました。お父さんは戰爭が終つて失業し、今は人夫をして居りますが、お父さんの收入では六人の暮はとても大變です。お父さんや、お母さんの苦しみを見ると兄弟達は僕達も働いてお父さん、お母さんをたすけようと相談してお父さんに話しました。お父さんは、

「すまないね、お父さんがふがいないばつかしに、お前達まで心配させて……。いいんだよ。これからうんと働くからお前達は勉强しておくれね」

と泣きながら言われました。

「お母さんも一生懸命やるから、お前達は心配しないで勉强してえらい人になつておくれ」

とお母さんも言われました。

然しいくらお父さんお母さんが一生懸命働かれても皆なに滿足に學用品も買つてやれません。兄弟は學校でかたみのせまい思いをして居りました。

お母さんは皆なのふびんさからつい盛り場で二度萬引をして、ある刑務所に入られてしまいました。四人の子供達は又相談しました。そして一番上の健治君、三番目の治男君、四番目の行男君の三人は一番勉强の好きな二番目の繁君だけのこして家を出て行きました。繁君は一人のこつて好きな勉强と一人ぼつちのお父さんをなぐさめつつ家を守つて居りました。

三人の子供達は家を出てから「銀座の子」になつてクツみがきをして一週間に一度はいくらかの金を家へとどけて居りました。

一人のこつた繁君は外の兄弟のたのみと、お父さんの「一人ぐらいは、いくらびんぼうしても中學を出してやりたい」という願いとで中學校へ入りましたが、帽子と服だけは買いましたが、學用品は一つも買えませんでした。肩身のせまい思いをして一ケ月程通學しました。

お父さんや刑務所に入つて居るお母さんはこの兄弟愛に泣かせられました。近所の人々も涙を流さない人は一人もありませんでした。繁君は兄弟達が街へ行つて歸らぬのに自分だけが中學生であることの苦しみはついに皆なの居る銀座へ走らせてしまいました。そしてついに四人の子供達はもう家に歸る心もなくなり、破れたボロ衣にヨモギの樣にのびた髪がよく似合うようになつて、つめたい夜の銀座裏のコンクリートの床にあつちこつちにムシロ一枚でねて、なつかしいお父さんやお母さんの夢も見ないまでのヤミの子になつてしまいました。

一番上の健治君は銀座四十人の浮浪兒から「大アニキ」と呼ばれる樣になつた頃、中學生の繁君はかつぱらいをおぼえ、三人目の治男君はたかりを始め、いちばん下の行男君は物もらいを本業とする樣になつてしまいました。

然し七つのこの子だけは何といつてもお母さんの溫い胸を忘れられなかつたのでしよう。

「お母さんさへ歸へつて來たらおウチへ歸へろうよ」と兄達に約束させました。このいぢらしい願が兄たち三人の心をもう一度ゆすぶつて

「惡い事はやめて、クツをみがいてお金をためよう——」

とみんなで一千圓貯金することにしました。この兄弟達のどりよくが實つて其の年の暮には六百圓になつて、もう少しだとよろこんでますます兄弟力を合せて働きました。

ところが不幸な運命は又兄弟達を襲つて來ました。それは弟の行男君が地下鐵から落ちて頭を血に染めました。その爲に一生懸命でためたお金はお醫者さんに拂わねばならなくなりました。

こんな事から中學生はある自働車からキャンデーのかんを盗んでしまいました。その中に大變高價な寫眞機が入つていたのです。その爲についに警察につかまり少年審判所へ回されてしまいました。

殘つた二人はけがをし頭を血のついたホータイで卷いた行男君をつれて、署長さんに繁君の歸れる樣にお願いに行きました。然しその時はもう繁君は審判もすんで少年保護所の方へ廻されて居ました、署長さんはやさしく

「君達は繁君の歸るまで一生懸命はたらいて待つて居てあげなさい、繁君はすぐ歸つてくるよ」となぐさめてくれました。三人はさびしく又銀座へ歸つて來ました。こうして以前の三人兄弟だけがのこつてしまいました。

「ねえ兄ちやん千圓だけじやお母さんが歸へつて來てもなんにもならないね、繁兄ちやんが一萬圓ためなくてはだめだといつてたよ」と二番目の治男君が健治君に言いました。

街に居るこの三人の兄弟はそれだけ世の中の有樣に感じる事が出來たのです。健治君はがつかりしましたが、せつせとクツをみがきました。四人が一人かけたこの三人の兄弟は胸を暗くして淋しく世の中を見つめる樣になりました。

希望をひしがれた弟の行男君は「僕は收容所に入つてお母さんが歸るまで待たう」といつて兄さん達や冷たいコンクリートの床と別れて板橋の養育院に行つてしまいました。

それから間もない頃、三番目の治男君は通る人のポケットをねらつて見付かり銀座の人ごみを逃げ廻りましたが捕つてしまいました、こうしてとうとう健治君一人になつてしまいました。

四人で約束した千圓貯金も今は夢です、繁君が言つた「兄ちやん一萬圓貯めなければだめだね」といつた事がどうしても忘れられず、クツみがきをしながらそれがどんなに大變な事であるかの考へに行きあたりました。

ある日十人ぐらいの浮浪兒が松屋の新しいPX前に集まつた時、それまで皆なの惡い事をさせない樣にして居た正義漢で通つて居た健治君が突然、

「おい、今日はオレがやつて見せる」と言放つて仲間の浮浪兒を驚かせました。

「よせよ、何時もオレ達がやるといけない惡い事はよせといつて居る兄きがやるなんて、それに今日はデカがいるからよせよ」と止めましたが聞きません。

「もう銀座ともおさらばだ」

といつて治男君の犯したおなじことを顏見しりの警察のおじさんの居る前でやり、その刑事の顏を見ながら人ごみの中をゆるく逃げて行きました。

そうしてある裏小路までくると、

「ハイ」といいながら捕つてしまいました。ねらつたのは二十萬圓入りのトランクです。

それまでもよく仲間に、

「せめて同じ感化院で弟達と暮せたら」といつていたのです。

こうして四人の兄弟は次々と銀座から消えて行きました。

お父さんはお仕事のあいまに子供達をさがしによく銀座に來ましたが、四人の子供達はお父さんの姿を見ると風の樣に逃げてしまうのです。お父さんは泣いて世の中をうらみました。お父さんは何回も銀座をさがしましたがもう子供達の姿は銀座からわ見えなくなつていました。

今お父さんは一人さびしく、

「自分の力がたりないのだ、世の中に負けたから、子供達まで辛らい思いをさせるのだ、つめたい世の中に勝たなければいけないのだ——勝つのだ、世の中に勝つのだ」と子供達のお母さんや子供達の歸えつて來る日を樂しみに一生懸命に働いて居ります。

一家六人が樂しく暮せる樣になるのはいつの事でせう。今は子供達をさがすかわりに、お寺や神社をおまいりして居るお父さんの淋しい姿を時々見受けるそうです。

# 編集後記

◇煙草が大幅に値上げされて驚いている間に、主食は一擧に五割方はねあがつた。公定價は六十餘倍賃金は三十倍の安本の企畫する新物價體系によれば當然の措置であろうが、十一月黑字說をふきとばして大衆の生活は死の寸前に追いこめられていく。

◇千八百圓ベースは耐乏生活どころか餓死をしいる。元來、政府が新物價體系を發表した時は、これで物價が安定するようなことをいつたが、その後の情勢では物價は一向に安定せず、新物價體系とは㊙の大幅引上げにすぎなくなり、大衆の生活を窮地に追いこむ結果となつた。時あたかもヤミを取調べる東京の一判事が職務上の良心から〇公だけで生活をしたあげく榮養失調で死亡した。

◇久しぶりに佐藤賢順氏の玉稿をいたゞいた。慈味掬すべき好文章である。

◇終戰後、すでに二年餘、生活の向上を期待しながら、事實は一年ごとに惡化していく。去年の生活も苦しかつたが、今年は更にその幾倍かの苦しさである。

◇恐らくこの冬は燃料の不足から豫想以上の生活難が訪れるだろうそして來年は輸入食糧の激減から終戰後もつともひどい食生活の不安が到來するだろう。

◇結局この危局の打開は、生產增强による方法以外にはないが、この增產意欲をたかめる道は、單に政治的なそして經濟的な手段ではひらかれない。

◇高度の精神的な要素、極言すれば宗教的な力が加味されねばならない。

◇社會不安の增大に比例して宗教の意義はいよいよ大きくなる、宗教ジャーナリズムの健全な發展は益々重要である。

◇この際、再び〝淨土〟の値上げを發表するのは寔に恐縮であるが印刷費の昂騰、紙の値上げ等、インフレの昂進で三圓の定價は維持できず、萬止むを得ず、今月から五圓とした。

◇五圓といえば、ピース一本分である。市價にくらぶれば安價ではあるが、愛讀者諸氏に申譯けなく思つている。どうか本會の苦衷を推察されて、今後とも御愛讀御援助賜わらんことを、切に切に御願ひ申上げる。

◇栗山氏は新聞記者、ジャーナリストの世相觀察は興味ぶかいものがある。黑川氏は富山縣下の住職特に本誌に寄稿せられたのであるが、投稿は本誌の最も歡迎するところ、會員諸賢の投稿を待つている。來號も吉田絃二郎氏は玉稿をよせられる筈、佐藤良智教授の「一枚起請文講話」も用意している。御期待を乞う。

◇冬は間近かにせまつてきた。燃料不足、自肅停電の勵行、等々今冬の苦しさは今から察しられる。愛讀者諸彥の御健闘を切に切に祈りする。（東）


「淨土」十・十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和廿二年十月二十日印刷
昭和廿二年十一月一日發行
（定價五圓）

東京都芝區芝公園淨土宗務所
編輯兼發行人　中村辨康
東京都神田區神保町三ノ一〇
印刷人　春山治部左衛門
東京都神田區神保町三ノ一〇
印刷所　共立社印刷所
東京都神田區淡町路二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社
發行所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園淨土宗務所
振替　東京　八二一八七番
會員番號B　一〇八〇一四

會費
一ヶ年　金六十六圓
（送料六圓を含む）
振替拂込みはすべて一圓五十錢增のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十二年十月廿日印刷納本　昭和二十二年十一月一日發行

淨土　第十三卷　第九號　定價金五圓（送料五十錢）